

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 澁谷智子

本論文「聞こえない親を持つ聞こえる人々—文化の中で自己の語りはどう作られるのか」は、日本においてほとんど先行研究のない「コーダ」(Coda: Children of Deaf Adults 聞こえない親を持つ聞こえる人々)に関する、初めての実証的研究である。1990年代以降日本でも社会的、理論的に周知されるようになった「ろう文化」の領域の中でさえ、コーダは周辺的な存在と見なされがちであるため、文化的境界者として育ち、その過程で様々な問題、葛藤にさらされている有様を、詳細に追究した研究はほとんどなかった。その研究テーマの性格上、本論文も学問分野を必然的に横断し、比較文化学、社会学、障害学、異文化間教育学などの知見を十全に盛り込み、独自の分析方法を編み出そうとしたものである。公開審査会当日には、手話同時通訳も公式に用意され、音声言語のみで通常行われてきた博士論文公開審査会に、新たな形式と可能性が導入されたことも、特筆に値するだろう。

本論文は全四章で構成され、別冊で付帯する資料集が、論文と共に常に参照されるべき一次資料の役割を果たしている。

世界的に見た場合、コーダ研究についてのまとまった、優れた研究は唯一、アメリカの文化人類学者ポール・プレストンの著書(1994)が挙げられる。その書物の邦訳(2003)者の一人でもある澁谷氏は、プレストンの調査対象が専らアメリカ国内のコーダであることに鑑み、本博士論文をまとめる大前提として、日本国内のコーダと知り合い、インタビューをし、アンケートを取るという営為を7年間にわたって続け、その成果を社会学的方法で分析し、別冊資料集としてまとめた。それによって、プレストンの先行研究の成果を確認しながらも、独自の観察と考察を加えた4章立ての構成が導き出されている。

序論および第1章「コーダをめぐる背景」では、「ろう文化」研究に必要なタームが整理され、さらにコーダという存在を、異文化間教育学で頻用される「CCK(Cross-Cultural Kid)」という境界者の概念として捉え直しながらも、一般的なエスニック・マイノリティとは異なり、その身体的特徴や文化が継承されず、「ろう者」の文化と「聴者」の文化を混淆したかたちで内面化している存在であると説明される。

第2章「コーダのコミュニケーション」からは、前述した付帯資料集の分析を基盤として、日本のコーダを実際に取り巻く状況や、諸々の問題を明るみに出す。ここで中心的テーマとなるのはコーダのコミュニケーションである。手話が独自の文法構造をもつ「言語」であることは、近年よく知られてきたが、本章で筆者は、次に言語学の成果を援用し、いわば日本手話と音声日本語のバイリンガルとしてコーダを捉え直す。思春期のコーダに良く見られる問題としては、ろう者の両親との意志の疎通がうまくいかなかったと感じる不全感。一方で、コーダと両親の間では、手話のみならず、口話、声、筆談、身振り、ホームサインに至るあらゆるコミュニケーション手段が駆使されるために、コーダ自身は長じてから、(本格的な)手話にも日本語にも熟達していないのではないかという、苦手意識をもつ傾向が見られると分析される。

第3章「社会の障害観とコーダ」では、本来なら聞こえる人として障害を持たないはずのコーダが、社会から「聞こえない人の子ども」として、同情や特別視の対象となる中で

生ずる問題について分析する。ここではプレストンの先行研究と同じく、「通訳すること」と「責任を持つこと」が、社会によって過度に期待されている様が浮かび上がってくる。

第4章「コーダの語りの生成と変化」は、本論文で最も独自の分析と見解が示される部分である。約7年間の参与観察を経て筆者が到達した見解は、プレストンと異なり、成人となったコーダの、自らの人生の語り方、あるいはコーダについての問題意識は、徐々に変化していくという点である。成人後、職業としての通訳者をめざす体験、コーダ同士の出会いや問題の共有意識が、彼らの「語り」を変化させていく。第4章5節では日米のコーダの特徴的差異として、(1)日本のコーダは自分たちを、アメリカの例と違って「アダルトチルドレン」のような心理学的説明モデルで語らない。(2)日本は世界的に見ても稀なほど手話学習が行われている国であり、そのおかげでろう者やコーダが閉鎖的なコミュニティに囲われていないという利点がある。(3)日本のコーダは、自分に要請される日本語の運用能力を高い水準で測り、その結果として自分の日本語能力を過小評価する傾向にある。(4)日本のコーダはアメリカのコーダほど、アイデンティティの葛藤について語らない——という4点の結論が出されている。これによって、文化的境界者としてのコーダが、社会との相互作用の中で自己を位置づけていく有様が、きわめて実証的かつ緻密に記述された論文と、結論づけることができるだろう。

審査会ではまず一致して、聴者である筆者が、ろう者やコーダの方々と誠実かつ長期の調査を継続した成果である貴重な分析と、その結果を高く評価した上で、むしろ今後の学問的進展につながる問題点が、それぞれの専門家から指摘された。

社会学からは文化の概念からコミュニケーションへと方向付けるこの論文のベクトルがむしろ全く反対にコミュニケーションの不全感から出発するはずではなかったかという概念的プロセスのあり方、エスノメソドロジーからはプライベートな情報に属する調査結果をいかに抽象化するかという方法論的問題が十分自覚的に論じられていないこと、比較文学からは「語り」に関する文学理論の消化が物足りないこと、さらに比較文化論で近年精緻化されている「異文化理解の倫理」に関する考察が脱落していること、などが指摘された。また多くの委員から、調査したコーダそれぞれの多様性を尊重する誠実さのあまり、個別の語りをグラント・セオリーに発展させる方向性を自ら抑制することになったのではないかという指摘がなされた。

しかし以上の指摘は、あくまでも今後の進展への希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものではないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。